

証の書にある「口実にして」

各時代の希望 第17章 ニコデモ 本章はヨハネ3:1—17にもとづく

ニコデモはイエスとの面会を非常に望んだが、公然とイエスに会うことをちゅうちょした。ユダヤ人の役人が、まだほとんど名も知られていない一教師に共鳴していることを公然と表明することは不面目なことだった。イエスをたずねたということがもしサンヒドリンに知られたら、彼らの嘲笑と非難とを招くであろう。彼は、自分が公然とたずねるとほかの者たちがまねをするからという理由を**口実**(言い訳)にして、ひそかにイエスに面会しようと決心した。特別な調査によって、オリブ山にひっこんでおられる救い主の居所を知ると、彼は町が眠りのうちに静まるまで待ち、それからイエスをたずねて行った。

人類のあけぼの 第22章 モーセ 本章は、出エジプト1—4:に基づく

しかし、神のしもべモーセは、自分の前にある不思議な驚くべき働きのことを思って圧倒されていた。彼は、苦しんで恐怖をいだき、話がよくできないことを**口実**にして、嘆願した。「ああ主よ、わたしは以前にも、またあなたが、しもべに語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです」(同・4:10)。彼は、長い間、エジプト人と交わっていなかったため、以前のようにエジプトの言葉をはっきり知っておらず、以前のようにすぐに言葉が使えそうもなかった。

人類のあけぼの 第72章 アブサロムの反逆 本章は、サムエル下13—19:に基づく

もし、神がダビデの罪を譴責せず、彼が神の戒めを犯しているにもかかわらず、平和と繁栄のうちに王座を占めていたとするならば、(人間はすべてにあてはまる真理を認識できないとする) 懐疑論者や無神論者は、ダビデの生涯を引用して、それを**口実**にして聖書の宗教を非難したことであろう。しかし、主は、ダビデにこうした経験をお与えになって、主は、罪を黙認することも許す(→赦す)こともできないことを示された。われわれは、ダビデの生涯によって、神が罪を処理される時に持っておられる大目的を悟り、どのように悲惨な刑罰の中にも神の恵みと憐れみに満ちたみ心の動きをたどることができるのである。神は、ダビデがむちの下を通るのを許されたが、彼を滅ぼされなかった。刃は、滅ぼすためではなくて清めるためであった。主は言われる。「もし彼らがわが定めを犯し、わが戒めを守らないならば、わたしはつえをもって彼らのとがを罰し、むちをもって彼らの不義を罰する。しかし、わたしはわがいつくしみを彼から取り去ることなく、わがまことにそむくことはない」(詩篇89:31—33)。

各時代の争闘 第29章 罪惡の起源 罪の存在に対する疑問

どうして罪というものが起こったのか、なぜ罪があるのかということは、多くの人々の心を苦しめる問題である。人々は、悪の働き、その恐るべき結果である不幸と悲しみを見て、いったいなぜ限りない知恵と力と愛であられる神の主権の下にこうしたすべてのことが存在するのかと疑問をいだく。人間の説明できない神秘がここにある。人々は、半信半疑でいるために、神のみ言葉の中にはっきりあらわされていて救いに不可欠な真理を、悟ることができないのである。なぜ罪というものがあのかということを探るために、神が啓示されたことのない点まで追求する人たちがいる。そのため彼らは、この困難な問題を解決することができない。疑ったり、あさがしをしたりするような気持ちに動かされる人は、これを**口実**にして聖書のみ言葉を拒否してしまう。中にはまた、言い伝えや誤った解釈のために、神のご品性、神の統治の性質、罪に対する神の取り扱いの原則などについての聖書の教えに暗くなり、悪という大問題について満足な理解を得ることができない者もある。

キリストへの道 悔い改め

悔い改めない人は、クリスチャンととなえる人々のことを**口実**にして「私もあの人たちと同じぐらい善良だと思ふ。あの人々が自分よりも真面目で、慎重に行動しているとは思われない、私と同じように快樂を愛しているし、わがままもする」と言います。こうして彼らは他人の欠点を拾い上げて、自分の義務を行わなくてもいいと言い訳しているのです。しかし他人の罪や欠点は言い訳にはなりません。なぜならば、主は私どもに間違いの多い人間を模範としてお与えになったのではないからです。私どもの模範として与えられたのは、傷のない神のみ子であります。クリスチャンの間違いをかれこれ言う人こそ、より良い生活、より良い模範を示さなければなりません。クリスチャンについて、こうしなければならぬとそれほど高尚な意見を持っているとするならば、彼らの罪はかえってそれだけ大きくはないでしょうか。なぜならば、彼らは正しいと知りながら実行しようとしないからであります。